
-RiuRiu-

深紅の流れ雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- R i U R i U -

【コード】

N 6 4 0 5 E

【作者名】

深紅の流れ雲

【あらすじ】

魔法高等学校4人の暴走青春学園コメディ！

第一章

朝の木漏れ日が心地よく、俺（進堂 郁 17歳）は清々しい気持ちで並木道を歩く。

俺の隣にいる一人の真つ赤な髪の子（藤原 怜 年齢知りたくない）は、朝じゃなくても楽しそうだ。

「ルルルルルルルルルル」

歌とは到底呼べない歌を歌って上機嫌。

並木道が終わる交差点にいつもどおりの男女がいる。人目も憚らず抱擁してた。周りの僅かな人は何時ものことだと、関係なしに歩を進める。（そこまで日常の風景になる二人もすごいと思う）

「おはよう。恵介。ノア。」

俺と怜が声をかけると二人は抱擁したままこっちに返事を返す。

「おはよう。いーくん。れいちゃん。」

「……おはよう……。」

明るい恵介と明るいとは絶対言えないノアの正反対の二人だが、うざいと言つことすら疲れる熱々つぶりだ。恵介とノアは抱擁をやめて、ノアが恵介に腕を絡めてひつつけて歩き出す。

「いい加減朝の抱擁とそれはどうにかならないのか？」

「一応ツツコミを入れとく。」

「だって。やめよっか？」

恵介が腕を振りほどこうと軽く腕を動かすが、しっかりノアが固定。

「……だめ……。」

ノアのはつきりとした言葉と態度に、とりあえず肩をすくませる。不意に横からのすばやい気配に、一步逆方向に大きく跳ぶ。

気配の正体は、怜がものすごい勢いで抱きつこうとされていたようだ。

「チツ。避けたか。」

「普通避けるって……。」

悔しそうな怜にうんざりした郁。

そんなやり取りをしながら学校を目指す。
ちなみにただいま9時。(SHR開始は8時40分)

キーンコーン。

1時間目の終わりを告げるチャイムが鳴り、教師はさっさとどこかへ行った。

俺達はあの後結局1時間目の授業途中で堂々と乱入。みんなで仲良くバケツを持って、廊下に立っていた。

「いやあ。終わった終わったー」

「・・・終わり・・・。」

「んー。終わったのか。寝てたぞ私。」

「いや。寝るのはどうかと思うぞ。」

ザパー。みんな思い思いにバケツの水を水道に流す。

さて。教室に入ろうかと言うところで、魔法結界が張られる。

荒々しい声が横からかけられる。振り向くと黒づくめの衣装の集団。

「・・・我々は黒魔術師研究会の者だ！！今日こそ今までの汚名晴らせてもらおう！！！！」

この学校は魔術師養成学校であり。その魔力に応じてS、A、B、Cにランク分けされるが、人数制限がありSは一学年5人。Aは20人。と言った具合にだ。ランクを上げる方法は単純に魔力測定での結果ともうひとつ。決闘による勝利である。

「今日は誰が行く？」

「私が二度と魔法使えないようにしてやるつか。」

「・・・どうでもいい・・・。」

「怜でいいよ」

会議の結果怜に決定。

怜が数歩前に出る。

「さあ。なんなら全員まとめてかかってこい！」

「上等だ！！喰らうがいい！！」

一斉に黒づくめの集団から一つの魔方陣が形成され、そこから大量の、車ぐらいの大きさの火球が怜にめがけて飛ぶ！

「ぬるい！そんな火で私を倒せると思うなよ！」

怜の右手に赤色の光が纏い、火球を受け止め、難なくかき消す。そのまま怜は黒づくめの集団まで走る。全力の魔法を難なくかき消されたことで、圧倒的な力の差に焦る黒づくめたち。

「わっ！我々の負けだ！だから、だだだだからもうやっぎゃあああ！！」

ドーン。ぶしゅうううう

強烈な爆音と立ち上る黒い煙とかすかに肉の焦げた匂い。黒づくめの衣装じゃなく黒焦げの集団になっていた。

「全部。受け止めてくれないと困るぞ。」

俺の素直な感想。火球はこっちにまで飛んでいたのだ。全員なんともないけど。

魔法結界が解け、ギャラリィは歓喜の声を上げる。

「つしゃあああ！勝ちだああ！」

「いやあああ！すっかりしてよね！」

「もう少し手加減しろよお前等！」

もう。俺たちの決闘の賭け事は恒例みたいなものだった。

俺達4人はSクラス。要するに>測定不能領域くな問題児の集まりなのだから。

キーンコーン。

昼休みを告げるチャイム。俺たちは何時もどおり、屋上にランチタイムといこうとしたところで、アナウンスが流れる。ピンポンパン
ポーン

『にゃー』

「猫だ」

「猫だな」

「にゃーにゃー」

「・・・にゃあ・・・」

『あ。こら。だめだつて。もう！あーあー。テステス』

にゃーにゃーというコーラスと共に一人の女性の声流れる。

『至急。猫愛好部の者は生徒会室に來なさい。』『にゃー』ピンポンパンポーン

「えーつと。行くか・・・」

「・・・」 「りょーかいつ」 「うむ」

コンコン。

ノックの音に反応する声と鳴き声。

「はいつてくれ。」

ガチャ。

入ると視界には至る所に猫猫猫。猫屋敷かと思うほどに猫の村状態だった。

その猫の長（生徒会長）は一匹の猫を膝に抱えながら椅子に深く腰掛けていた。

「会長。生徒会室こんなに使っていいんですか。」

俺の質問に当たり前のように答える会長。

「ふん。私の部屋を私がどう使おうと自由だろう。」

いや。既に私物化してる時点でおかしいんだけどなあ・・・まあいつか。

「それで用件はなんですか。会長？」

「ああ。これを見てくれたまえ」

会長は机から一枚の写真を取り出す。

「これが。なんですか？」

それは黒を基調として鼻から胸にかけて白の入った猫の写真だった。

「この猫の名前は・・・ムクだ。」
会長の言葉が重々しく生徒会室に響く。

t o b e c o n t i n u e d . . .

第一章（後書き）

どうも。深紅の流れ雲ですー、（、ー、）ノ

楽しんでいただけたでしょうか！楽しんでいただけたなら幸いです。

楽しんでいただければ精進する次第であります。（、；；、）

ウツ…

感想・クレーム・誤字・脱字なんなりとお申し付けくださいませ！

また次回お会いしましょうノ

第二章

「……ムクですか。」

その重圧を破ったのは郁だった。

「ああ。ムクだ。」

「その……ムクって猫がどうしたんですか……。」
当然の疑問。

「ムクが……朝学校に来たときには……居なかったんだ。」

「はあ。猫ですし。お腹が空いたりしてどっか行っちゃったんですかね。」

「くっ！お前につ！私のこの悲しみが分かるものかつ！！」
涙目で理不尽にいきなりキレ出す会長。

「えーっと。俺には……分からないかなあ。」

元々俺は動物を飼ったりしてないのだ。分かるはずもない。
しかし、会長は信じられないという顔を浮かべ、叫ぶ。

「貴様あ！それでも猫愛好部の人間か！私は！悲しい！」

「いや……。俺はそんな部入ってな「見てみる！他のやつらを！」
俺の訴えは会長の叫びにかき消され。やれやれと横を振り向く。

「……っ……。」
「まだ……死んだと決まったわけじゃない……
はずだよ……。」
「ううっ……。」

涙を浮かべる3人が横に。（正面に号泣が更に1人）

何だろう。この俺の疎外感。俺まで泣きそう。っていつかお前等ムクとか知らないよネ？

「えーっと。分かりました……。ムクを探してくればいいんですね？」

「うむ。私も午前中探し回ったがいなくなっただけな。昼休みの間にこの猫の世話もしなければ、いけない訳だ……。連れて来てくれた奴には購買部特製の『もふもふプリン』を……。」

聞くのが早いか出るのが早いか。郁を残した3人は一瞬で消えた。

「分かりました！……っておい！お前等ああああ！」
郁は全力で駆け出した。

ムクとかいう黒猫を郁は、案外簡単に見つけた。

とりあえずグラウンドに出た所で、体育館周辺に人だかりが出来ているのを見つけて駆け寄ったところ、体育館の屋根に乗っていた。多分黒猫は魔法が多少なりとも使える種だが、魔力が尽きて飛べないのだろう。急いで救出しなければならぬはずなのだが、屋根の上空で争う2人がいた。

「やれやれ……。」

郁の足に魔方陣が形成される。その魔方陣が踏み台のように蹴り飛ばして、郁は大空に舞い上がる。

上空で争う2人とは怜とノアであって。

本来飛行系統の魔術は一流の魔術師しか使えないものはずが、彼女達は当たり前のように飛んでいた。尚且つ多重魔術を駆使して。

「……ぷりん……。『第1術式……星夜……』」

ノアの突き出された右手に手のひらサイズの魔方陣が形成され、超魔力圧縮砲が放たれる！

「私にそれを向けるとはいいい度胸だな！」

怜も右手を突き出し昼間同様の赤い光を纏い、その圧縮砲を四方に拡散させる。

きゃあああああ！

うおおおおおお！

拡散された圧縮砲の一部が人垣に飛んでいるが、二人は気にしない。

「……もふもふ……。『第2術式……月影……』」

ノアの背中から魔方陣が形成され、多数のミサイルが怜に向けて飛ぶ。

「ちっ！物質構築魔法か！『紅蓮！』」
右手の赤い光が言霊を受け、更に輝きを増す。そのまま怜は、ミサイルの弾幕に突っ込む。
ドドドーン。強烈な連続した爆発。どこぞの戦闘アニメにでも出てきそうなシーンだった。

いやあああああ！
うわあああああ！

その爆発の中心から割るようにして二人が出てきて更に上空へと飛んでいく。（当然被害無視）

ちなみに、一緒に飛び出したはずの恵介はというと・・・。
郁が屋根に着くと、恵介は屋根にいた。黒猫のすぐ近くに。

「恵介！ノアと怜をぶつけてお前はこそこそと！」
郁は叫んだ。

「んー ごめんねー これも戦略ってヤツなんだよねー」
全く悪気のなさそうな恵介。
「お前が・・・。その気なら・・・。」

郁は、はるか上空で米粒のように見える二人に向かって叫んだ。

「ノア！！恵介は今週末に綺麗な先輩と映画を観に行くぞおおお！！！」

聞こえるはずもない。ないのだが・・・。先ほどの圧縮砲が恵介めがけて放たれる！

「僕は！」
恵介は魔法障壁を構成。
「無実だ！！！」

圧縮砲の威力が弱まる。
「ノア！！騙されるな！！恵介は来週末は可愛い後輩と動物園だぞ！！！」

圧縮砲は3倍以上に膨れ上がり魔法障壁を粉碎し、恵介を貫く。

「信じて……くださ……げふっ。」

直撃して、墜落していく恵介。南無……。

その隙に、郁は黒猫を救出して生徒会室へ全力飛行。

生徒会室の窓まで近づいて来たところでスピードを落とし始める。

しかし、それが悪かった。猫は郁の最速度を借りたまま、最後の力を振り絞り、猫は自力で生徒会室に入る。

「おおっ！ムクっ！」「にゃあああ。」

窓から入ってきたことに気づいた会長は、涙を浮かべながらムクとの感動の再会。

「そんなのって……ありがよ……。」

ガツクリと肩を落とす郁。

「ふん。そうでもない。手伝った礼だ。事前に全員分用意してある。」

「すてき！会長！」

それじゃ、がんばった意味ないじゃんとかいうツッコミはなしに、元気を取り戻す郁。

「……しかし。これは猫愛好部の者しか「やだなっ！会長。僕猫愛好副部長じゃないですか！」

会長の言葉をかき消す郁。

「ふん。」

会長のご機嫌か不機嫌かイマイチ分からない返事を聞いて郁は、恵介の救出とノアと怜の仲裁に向かった。

もふもふプリンはなんていうか。すごくもふもふしてました……。

t o b e c o n t i n u e d . . .

第二章（後書き）

どうも。深紅の流れ雲ですー、（、ー、）ノ

楽しんでいただけたでしょうか！楽しんでいただけたなら幸いです。

楽しんでいただければ精進する次第であります。（、；；、）

ウツ…

感想・クレーム・誤字・脱字なんなりとお申し付けくださいませ！

また次回お会いしましょうノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6405e/>

-RiuRiu-

2011年1月5日14時44分発行